「横穴式墓」攷

古　藤　忠　志

Ⅰ．はじめに

これまで多くの先学らによってすすめられてきた横穴式石室、横穴等の横穴式墓の研究は型式学的編年研究・系譜論的研究、一方で葬送儀礼、棺体配置の諸問題や親族構造の諸問題に至るまでみられる。しかし、前者を中心とした研究は「墓」というよりは構造・構築物としての研究が中心であり、儀礼・埋葬に関する当時の墓としての検討がすすんでいないのが現状である。これは横穴式埋葬施設は追葬を可能とした構造をもつ一方で屍体埋葬当初のかたちをとどめていることは稀だからである。横穴式墓が構造上盗掘や破壊が容易で、偶然でない限りではその原形をとどめるものは全国でも少ない。多くの場合埋葬に関して提示されてもそれは最終段階の埋葬状況を把握するだけであって、埋葬施設の初葬時から最終埋葬までを復元するまでには至っていない。そのために研究が構造論・築造技術論・型式学的編年論・伝播論等が主となるのも当然である。

Ⅱ．横穴式墓の定義

本論で使用する「横穴式墓」と筆者が称する墓制は、墓壙を竪にもつに竪穴式墓とは異なり墳丘の有無に関わらず側面の横口から玄室内に屍体等を搬入する構造をもち、屍体等を納める玄室と、それらを搬入する羨道からなり、羨道入口部を礫石や板石等で閉塞した遺体埋葬施設のことである。これは本来横穴式石室や横穴等と称された横穴系の埋葬施設であり、それ

らを総括した名称である。これは側面から屍体を納める点で共通性をもち、さらにお互い影響をもって発展したことから統一して「横穴式墓」とした。これと対立するのが伝統的にみられる「竪穴式墓」である。横穴式墓は西日本を中心に横穴式石室や横穴等として全国的分布をみせる。

追葬を可能とした横口をもつ埋葬施設を「横穴式墓」という名称を用いるのは、型式・形態等の分類上用いられる名称である「北部九州型」・「肥後型」・「筑肥型」・「畿内型」等の分類上の型式名を一旦白紙にし型式名にとらわれないことを第一条件とする。また分類上の型式名を用いず「横穴式墓」と名称をもちいるかは、埋葬施設という単なる屍体埋葬施設ではなく、儀礼、埋葬等をともなう施設であり、横口をもった墓がどの様に当時機能したかを屍体埋葬、その配置を中心に検証し、当時の墓制を通じて当時の社会的背景について検討するためである。

また、本論のなかで用いる屍体埋葬配置に関して定義しておきたい。屍体埋葬配置と用いる際には、横穴式墓築造時に設定された屍床またはそれに準じたもので、和田晴吾氏が定義する「据えつける棺」と「持ちはこぶ棺」との違いによる。つまり「据えつける棺」で構成された屍床配置のことを指し、「持ちはこぶ棺」による屍床配置を指しては屍体埋葬配置とは用いない。これは追葬時に木棺等を玄室内に搬入し追葬するものと、既に設定されたものとを区別するためのものである。ただし持ちはこぶ棺でも既に横穴式墓構築時に安置位置を設定されたものに関してはこれと区別・判別したい。

Ⅲ. 横穴式墓の分類

代表的な横穴式墓に関して概観すると、屍体埋葬配置が大きく二つに分類される。それは屍体埋葬配置を明確に示すA式と示さないB式がある。またA式の多くが、コ字形あるいはその亜式であるL字形、二字形である。これはコ字形を呈した屍体埋葬配置をなす三体埋葬を主とする横穴式墓

（A式１種）と、二字形を呈した屍体埋葬配置をなす二体埋葬を主とする横穴式墓（A式２種)、また岡山県千足古墳のような一字形屍体埋葬配置をなす一体埋葬を主として考えられる横穴式墓（A式３種）が存在する。前者らとは大きく異なり複数または単数であっても屍体埋葬配置を明確にしない横穴式墓の存在があり、多くの横穴式墓がこれに属する。前記その代表的な横穴式墓を挙げた。以下ではそれら分類を明確にし、分布と特徴について検討してみたい。

１．屍体埋葬配置Ａ式

ａ．１種／コ字形

この屍体埋葬配置をなす横穴式墓は北部九州には希薄な分布であり、肥後地方を中心とした中九州を中心として古墳時代後半期以降に肥後型と称される横穴式石室墳、横穴にみられる。また側壁に屍床の一方がなく片方のみ存在するＬ字形屍体埋葬配置をもつ佐賀県浜玉町淵上古墳や奥壁二屍床になったＬ字形をもつ唐津市横田下古墳が存在していることも注目される。コ字形屍体埋葬配置及びＬ字形遺体埋葬配置をみると既に設置された棺として石室構築時に企画された屍体埋葬配置がなされていたことが窮える。これは古墳時代前半期以前の弥生墳墓にみられ、和田晴吾氏のいう「据えつける棺」の伝統を受け継ぐものであろう。しかし、それは単に据えつける棺でありながらも複数の追葬を可能にした埋葬施設をもった横穴式墓という構造上、コ字形またはＬ字形屍体埋葬配置をなすものが出現したと考えられる。この伝統がさらに横穴での削出しによる縁付屍床の出現につながっていくものと考えられる。

ｂ．２種／二字形

この屍体埋葬配置をもった横穴式墓は横穴に多くみられ、また石障系Ｂ種にみられる。この形態をもった横穴式墓は奥壁並行に屍体埋葬配置をもっ

たものと、直行する屍体埋葬配置をなすものとが存在し、単純に同一に扱うことは避けたいがここでは便宜上同一のものとして扱っている。しかし奥壁に並行に屍体埋葬配置をもつものを２種ａ類とし、奥壁直行のものを２種ｂ類とする。

これもコ字形・Ｌ字形屍体埋葬配置をもった横穴式墓同様に据えつける棺として機能していたものと考えられる。一方で上の原横穴群でみられるような土器・礫石屍床によって屍体埋葬配置をもって簡略化された据えつけた棺としての機能をもったものへの変遷がみられる。多くの大型・中型の横穴がこの形態である。

ｃ．３種／一字形

この屍体埋葬配置をもった横穴式墓は北部九州に多く、仕切りは一字形を示している。だが、副葬品等からコ字形や二字形に分類可能なものも存在する。これは明確に屍体埋葬配置を意識して設けたものかそうでないかは横穴式墓における奥壁屍体埋葬の重要性と関係している。屍体埋葬配置が奥壁並行のものを３種ａ類、直行するものを３種ｂ類とする。

２．屍体埋葬配置Ｂ式

老司古墳に代表されるように、多くの竪穴系横口式石室においては棺をもたず屍体をそのまま玄室内に直葬したとみられ、屍体周囲に副葬品を配し、玄室空間内を仕切りや棺ではなく、一種の槨として利用し、屍体埋葬を行ったと考えられる。福岡県八女市立山山古墳群や甘木市古寺墳墓群等にも同様な傾向がみられる。しかし、老司古墳のような玄室空間からみて追葬可能な石室墳に多くみられるのではなく、多くが一体のみ埋葬可能な空間しかもたない横穴式墓に顕著にみられること、横穴であっても多くが小型の横穴に特徴的であることから、複数埋葬可能な空間をもったものと、小数つまり一体のみ埋葬可能なものと分類が可能かと思われる。

また多くの横穴式墓は特別に屍体埋葬配置をもたない。また舟形・家形

石棺等据えつける棺を使用しないということである。九州では木棺を玄室に持ち込んで埋葬することは少ない。一方畿内を中心とする横穴式墓は木棺を玄室内に運び込んで埋葬するものが多い。この「運びはこぶ棺」は屍体埋葬配置といて築造当初の玄室空間内に取り込まれていないことから、本論内で全てが持ちはこぶ棺であるときはこのB式に分類される。しかし横穴式墓の定義で触れたように既に築造時から安置位置を明確にするものに関しては判別し、据えつける棺同様に扱いたい。これには築造設計時を判断される材料は少ないができるだけ判断し、分類を明確にした。

Ⅳ. 横穴式墓の事例

ここで取り挙げた古墳は多数存在する事例から代表的なものを中心に列記している。(但し、分類表を割愛したためにⅢで挙げた分類に基づいて列記し、分布図と一致する。)

A1:2. 横田下古墳、4.関行丸古墳、8狐塚古墳、10.鋤崎古墳、12.寿命王塚古墳、27.小坂大塚古墳、28.井寺古墳、31.打越稲荷山古墳、33.城2号墳、37上塩冶築山古墳、院田16号横穴

A2:5. 円山古墳、6.龍王崎3号墳、7.四堂四反田1号墳、9.丸隈山古墳、23.御所山古墳、24.上ノ原21号横穴、30.塚坊主古墳、34.大鼠蔵尾張宮古墳、41.長者ケ平古墳

A3:1. 谷口古墳、3.久保泉丸山2号墳、6.龍王山1・2号墳、13.藤山甲塚古墳、15.弘化谷古墳、16.鬼塚2号墳、20.新原・奴山1号墳、21.手光古墳群南支群2号墳、貝島1号墳、24.上ノ原11・25号横穴、25.ガランドヤ1号墳、26.伊美鬼塚古墳、33.小鼠蔵1号墳、35.妙蓮寺山古墳、36.大念寺古墳、38.古天神古墳、39.宗像2号墳A石室、40.院田11・40号横穴、42.大宮古墳、43.千足古墳、44.おじょか古墳

B:11. 老司古墳、14.石人山古墳、17.立山山21号墳、19.久戸10号墳、29.

江田船山古墳、40.院田22号横穴

V. 結語

九州地方を中心に、山陰地方・一部畿内の横穴式墓について屍体埋葬配置という屍体を玄室内でどのような配置で葬るかについて修論では検討を試みた。全国的に検討を加えるべきであろうが、まず仕切を玄室内に造る横穴式墓を中心に検討を加え、さらに他の資料に関しても検討を加える予定があったが屍体埋葬配置を考える場合、多くが筆者が定義した横穴式墓の分類のB式に属し、膨大な検討が必要なため代表的な例に限定的ではあるが分析を試みた。この本論のなかで得られた結果を以下に要約してみたい。

1．横穴式墓のなかで初現的なものは伝統的竪穴式墓の要素を大きく受け継いで、石室主軸並行に屍体を埋葬する石室が北部九州を中心に存在し、横口を備えながらも本来追葬を予期しないものであり、後半期の古墳では局地的発展をみせる。

2．屍体埋葬配置からみて中・北部九州において奥壁屍体埋葬が大きく意識された世界を築いており、特に北部九州では常にそれが実践され、国分九州で6世紀中葉から採用される石屋形を有する横穴式墓に反映されており、当時のネットワークを考える上で重要な要素となっている。それの上に乗って横穴式墓に限らずネットワークを構築し、拡散・展開をみせる。

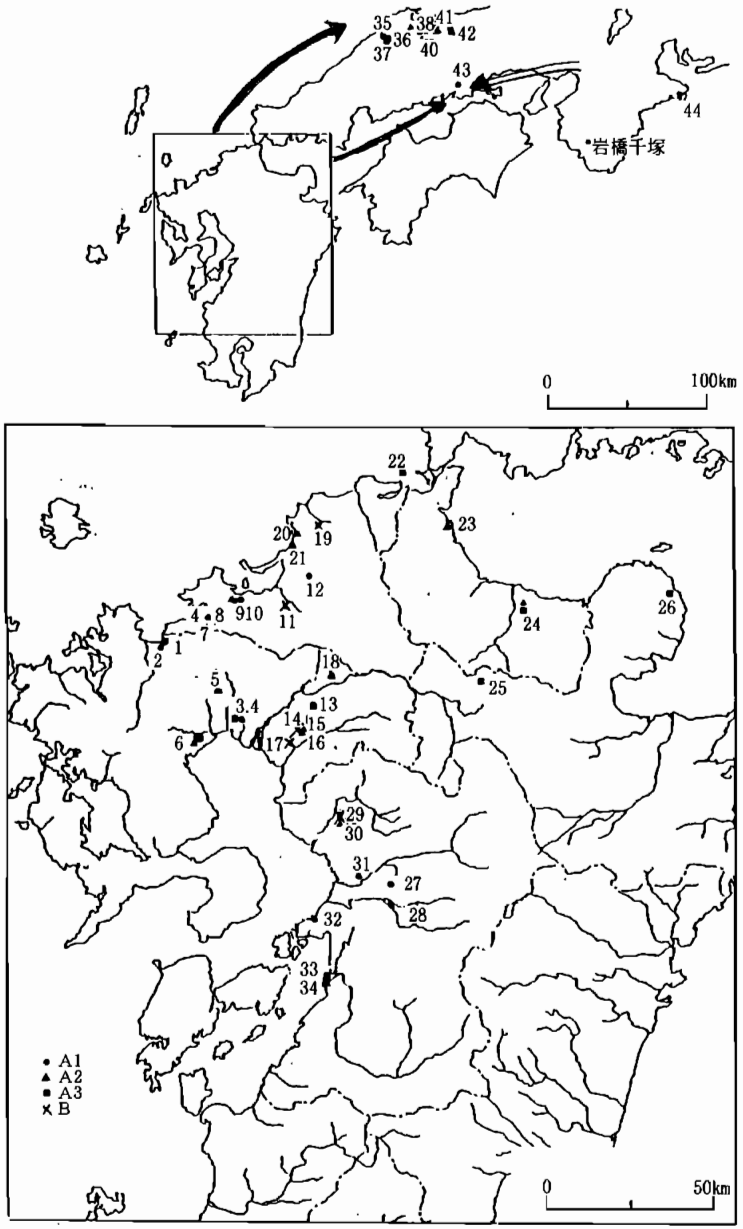
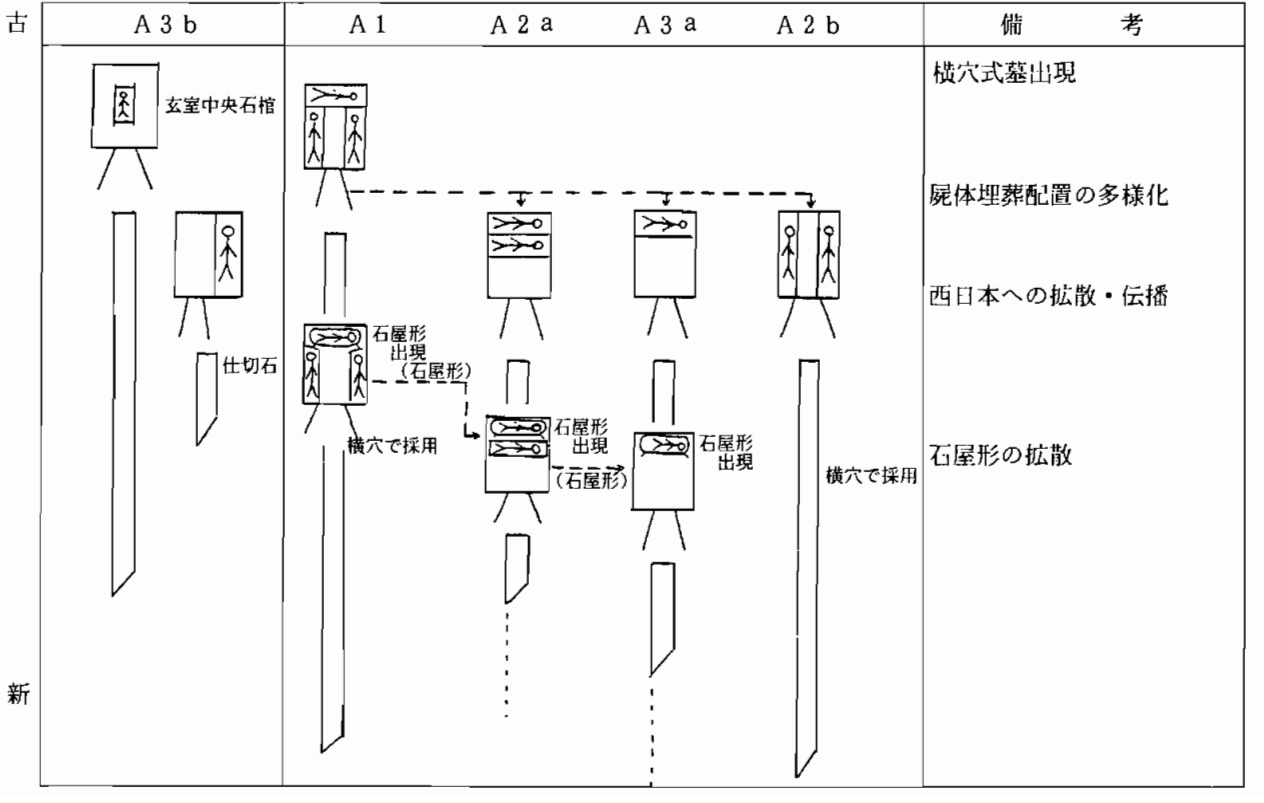
3．横穴式の展開・拡散期において筑後川流域と菊池川流域の古墳が大きく介在して、中・北部九州の横穴式墓の社会的ネットワークの仲介をなす。その存在として石屋形を有する横穴式墓であり、横口式家形石棺の存在がある。

4．同じA2種の屍体埋葬配置でも肥後地方（b類）と北部九州を中心とした地域（a類）との違いが存在し、それは両者の奥壁埋葬への意識の

違いと考えられる。しかし、これは石室墳に顕著であって北部九州の横穴では奥壁埋葬への特別な意識がなかったのか、そのようなものは存在しなく、肥後地方でみられるＡ１種は継承されても、Ａ２ａ・Ａ３ａ類は北部九州では石室墳から横穴へは継承されない傾向にある。

5．横穴式墓の拡散で九州から山陰・畿内へと伝播するなかで、故地でみられる形態に他地域との組合せがみられ、一元的に伝播形態を捉えることは難しい。

これ以外にも本論中で様々に検討を試みているが、まだ検討の余地が残されているものも存在する。現状の資料を通して検討できることは出尽くしたかと考える。古墳時代の横穴式墓だけではあるが、この検討を通じて墓制を考えるうえでの方向性を示すことができたと考える。


35
36
37
38
40
41
42
43
44
岩橋千塚
0
100km
22
23
20
19
21
12
4
8
910
11
7
1
2
24
26
18
5
25
3.4
13
14
15
6
17
16
29
30
31
27
28
32
33
34
A1
A2
A3
B
0
50km

A式　屍体埋葬配置にみる変遷概念図